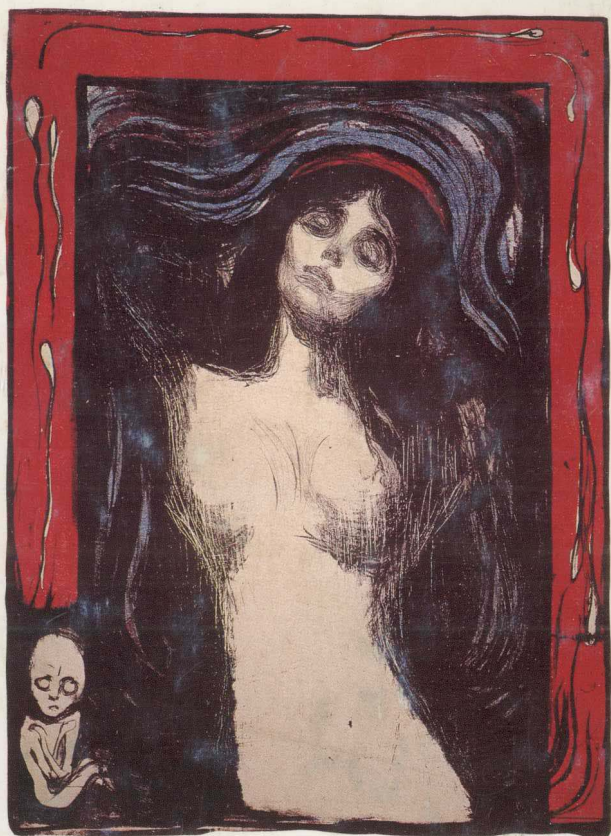




聖家族

河出書房新社

聖家族

昭和五十八年三月十五日 初版印刷
昭和五十八年三月二十五日 初版発行

著 者 日野啓三

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―一二

電話 四〇四―二二〇―(営業)

四〇四―八六一―(編集)

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

©1983 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

聖家族

装幀原画

エドワルド・ムンク「マドンナ」

Munch-Museet, Oslo
Munchforlaget A/S
through Orion Press

装幀者 巖谷純介

坂崎が入っていったとき、披露パーティーはすでに始まっていた。東京でも有数なホテルのかなり広い宴会場が、ほとんど人で埋まっている。はなやかな裾模様の女たち、黒服に艶のある白のネクタイを結んだ男たちをひとわたり眺めまわしてから、坂崎はわざと肩をそびやかして人群の中に分け入っていった。普通の背広を着たのは彼だけのようだった。

会場中央の一段高くなった場所から、新郎も新婦も、すでに人たちの中に降りていた。彼らを囲んでいるらしい人の輪からどっと起こる笑い声、会場全体に高まったり低まったりする潮騒のようなざわめきの中で、壇上の大きな金屏風だけがきらめきながら静かだった。

人の前でしゃべるのがうれしくてたまらないといった浮き浮きした口調で、司会役の男が、新郎の高校時代の教師の「お祝いの言葉」を指名し、坂崎にとっても旧師にあたる貧相な小男の国語教師が、緊張しきってマイクに向かって型通りのあいさつを始めたが、少なくとも聞いている振りだ

けでもしているのは、新郎新婦の年老いた両親たちだけで、うわついた会場のざわめきは、少しも
しずまらない。

親類と勤め先の後輩たちなのだろう、いかにも田舎風の男たちやまだ餓鬼っぽい若者どもが、ド
スキンの黒服を晴れがましく緊張して着こんでいるのが、癪にさわる。なぜか自分でもよくわから
ないのだが、儀式ぶったこと一切に、坂崎はイライラする。結婚なんてするだけで恥ずかしいこと
なのに、こんな豪勢な披露パーティなどをしやがって——彼は心の中で突っかかるように言う。本
人と親ぐらいならまだいいとして、どんな関係かわからないが、こんなに大勢の人間が臆面もなく
浮き浮きとはしゃいでいる。

だがやっと人波の中を探しあてた新郎に、一応型通りの言葉を述べるくらいの分別は、三十五歳
の坂崎にはある。同級生といってもとくに親しかったわけではない。この年齢まで結婚していなか
ったのが不思議なくらいの、ごく普通の男である。

「きみもそろそろ身を固めたらどうだ。いつまでも突っ張ってないで」

もうかなり祝い酒を飲まされたく、みっともないくらい顔を赤くした新郎が、なれなれしく
肩に手をかけようとするのを、さり気なく身を引いた。

「突っ張ってなどいないさ。この方がのん気なだけだ」

本当は「自然なんだ」と言おうとしかけたのだが、そう答えた。

「もう思いきって結婚しておかないと、ずるずると一生独身ですごしてしまふぞ」

新郎は顔を近づけて幾分声をひそめた。

「そう気づいたから、実はおれも思いきって踏み切ったんだ」

「一生そうだって別に悪くないだろ」

皮肉な気持はなかったつもりなのに、相手は一瞬表情を固くしてから、体を起こして高笑いした。「家庭料理が食べたくなったら、いつでも遠慮なく来てくれ。あいつは料理学校の免状も持っている」

やや離れて色とりどりの和服とドレスの若い女たちに囲まれた新婦の方を視線で示しながら、新郎は主人の落ち着きをみせる。わきの方から別の男が現われてあいさつを始めたのをしおに、坂崎はそこを離れた。新婦のまわりで拍手と黄色い歓声があがる。

「三人だって四人だって」と弾んだ声がする。子供のことだろう。坂崎は肩をすくめて、会場中央の料理台に近づき、むき身のシュリンプの入ったサラダを皿にとる。何か胃のあたりがむずずいしている。

皿を手には壁際に近づくと、ひとりの若い女が壁を背にしてひっそりと立っていた。色が透きとおるように白くて、くぼみ加減の眼窩の奥で大きめの黒い目が深々ときらめいている。鼻筋がすっとおっている。きれいな女だな、と咄嗟に感じたが、それ以上に女の態度、というより雰囲気が強く坂崎の興味をひいた。

服は一応黒い薄地のカクテル・ドレスを着こんでいるようだが、ごく細い銀の鎖のネックレスを首にかけているだけで、他にアクセサリーもつけてなく、両手で体の前に提げたバッグも他の女たちのようにきらめいてはいない。表情は穏やかな微笑を浮かべていて、ことさら身構えたりは決し

てしていいのだが、その女の立っているところだけが、うわつてはなやいだ会場の空気とはちがつて何かしんとした感じだ。

自然な親近感を、彼は覚えた。だが話しかけたりはしなかった。女も彼の方を見もしなかった。少し離れた壁際で坂崎はシュリンプ・サラダをゆっくりと口に運ぶ。

いま思いきって結婚しないと一生ずるずると独身で終わるぞ、と言った同級生の言葉を思い出した。「独身」という言葉は、彼は嫌いだ。自分で日頃「単独生活者」だと思っている。独身という言い方には、後家とかオールドミスという言葉と同じように、結婚を自明の前提とした後暗いような語感がある。その語感が嫌いなのだ。

単独生活者こそ人間の本来の姿なんだ、と日頃漠然と思っていることを、改めて思い返しながら、広い会場のざわめき全体を敵にまわすような高揚した気分を覚えかけたが、かすかに隙間風のようなものが心の中を吹き過ぎるのを感じた。本当は子供っぽく楯ついているだけじゃないのか。

そんなことを考えているうちに、サラダの皿はからになり、女のことも忘れた。

いつのまにか、壇の上の金屏風の前に五人ずつの男女が並んで、合唱を始めていた。頭の禿げかけた中年男が、大きなアコーデオンを胸にかけて、伴奏した。

恥ずかし気もなく下手な歌を、と肩をすくめた。ちょうど通りかかったボーイに、からの皿を渡すと、坂崎は会場を出る。会場全体に鳴りひびく拍手の音が、廊下まで聞こえていた。

ホテルの地下に、しゃれた店が並んでいる。輸入ものの衣料品、アクセサリーの店が多い。去年

からコートを買ひ替へたいと思つていたので、坂崎は衣料品の店を一軒ずつのぞいて歩いた。

紺のトレンチコートをもう六、七年着続けてきたので飽きていた。それにもう少し暖かいコートが欲しい。この間から時折、ふつとどこか旅に出たい気分が襲われる。どこへ、というあてがあるわけではないが、少し自分がたるんできつたような気がしている。思いきり自分を雪か寒風か荒涼と剥き出しの荒野にさらしたい。ちょうど入社十年の有給休暇が十日間とれる。

裏に毛のついた半コート。といつてそれほど厚く重くないもの。型としては幾分気に入るものがあつたが、表の皮がどれも茶色で野暮つたい。

もうこれでやめようと思つた最後の店の隅で、坂崎は一着のコートに目をひかれた。何色というのだろうか、かすかに青味がかった白っぽい灰色。しなやかそうな皮で、裏にやわらかい毛がついている。

「子羊ですよ、スペインの。軽くてとても暖かいですよ」

と店員に言われ、上着を脱いで着こんでみると、本当にウソのようにやわらかく暖かい。仕立てはフランスやイタリアのもののように丁寧ではないが、優雅な野性がある。色がいい。きれいだとかしゃれているというのではなく、何となく親しいのだ。そんな陰気な、とは言わないまでも、明るくも鮮やかでもない色が身近だとは、これまで意識したことはなかった。

だが値段を見ると、予想していたより三、四倍は高い。そんな金の持ち合わせはなかった。「もう少し考えてみる」

と断つて店を出た。店員が少しもイヤな顔をしなかったのが快かった。

だがどうしてあの妙な色がそんなに気に入ったのだろう。もう若くなくなったということか。地下の通路もエレベーターもロビーも、人で溢れていた。新婚旅行らしいふたり連れ、結婚式の帰らしい黒服の男たちや派手な和服の女たちがとくに多い。あの同級生の披露パーティーももう終わっただろう。

パーティーの時からずっと立ちづめ歩きづめで、坂崎は少し疲れを覚えた。ロビーと床続きに喫茶室が見えるのだが、席は一杯のようだ。ちやうどどやどやとひとかたまりの男女のグループが立ち去って、ロビーに並んだ長椅子のひとつが空いた。そこに腰をおろした。

午後四時すぎ。いやな時間だ。冬まではまだ間があるのに、日がめっきり短くなっている。間もなく日が暮れ始めるだろう。ひとりだけのアパートに帰るのは最もいやな時間だった。ずっと家にいる分には何ともない。だから普段、日曜には外に出ないことにして、夕食を念入りに作ったりするのだが、こうしていったん外に出ると、帰ってすぐ炊事をするのは億劫だった。

暮れ切ってしまったばい。正面出入口の分厚く大きなガラスをとおして、淀んだ池の中に沈みこんでゆくような夕暮の街が見える。淡く赤味がかって青っぽい光が、灰色のビルの並びと黄葉した街路樹を浸している。影が震えている。

白人観光客の夫婦たちが、大きくて頑丈そうなトランクを押してゆく。小さな滑り車がついている。髪の毛の白くなった女たちは鮮やかな色の服を着ているが、むっつりと押し黙っている。背の高い男たちも疲れて暗い目をしている。足早に歩きまわり、集まって無遠慮に笑い声をたてたりしているのは日本人たちである。次々と気取った姿勢や興奮した足取りで、人たちが坂崎の坐っている前

を過ぎた。幾つも並んだ長椅子の列でも、絶えず人が立ち上がったたり、坐りこんだりしている。

坂崎の両わきもいつのまにか埋まっていた。右側はふとった中年男。磨きこまれた赤革の靴が光っている。左側は若い女らしい。飾りのない黒い靴をはいた両脚を、隙間なくびっちりとそろえている。薄地の黒い上品なドレス。手首の部分がしまって、腕のところがやわらかく膨らんでいる。とくに興味を覚えたわけではないが、遠くを見る振りをして上体を動かし、視野の端に女の顔を捉えた。あの女だった。

顔つきと服装が宴会場の壁際にひとり立っていた女と間違いないが、何よりも、もし気づかなかつたら誰も坐っていないと思いつづけていたにちがいないほどひっそりした雰囲気、記憶のとおりだった。じつと黙って前を向き続けている。連れはいないようだし、誰かを目で探している様子でもない。

宴会場で見かけたときの身近な気分が甦った。

「いいパーティでしたね、と言いたいところですが、豪勢すぎてお祭りみたいだった」

坂崎は同類の親しみをこめたつもりで、努めてさり気なく声をかけた。女もとくに驚いた様子でもなく、上体を坂崎の方に向けた。

「ぼくはお嬢さんの高校時代の同級生ですが、あなたはお嫁さんの友達か、それとも親類……」

坂崎が言い終わらぬうちに、女は新郎と同じ会社に勤めている、と言った。見かけよりは生き生きした声だったが、やや鼻にかかるような、くぐもった感じのしゃべり方だ。

「それほどび抜けた給料をとっているわけでもないのに、あんな豪勢なパーティをどうして無理

してするんだろ。それともお嫁さんが大金持なのかな」

「お嫁さんも同じ会社です」

本当は見ず知らずの間柄のはずなのに、同じパーティに出ていたために、意外に気楽に口がきける。未知の女に、こんなに自然に声をかけられたのは初めての気がする。

「じゃあどっちかの親か、両方から費用を出してもらったんだろうが、ぼくは好かん。一生の大事というけれど、それだから自分にふさわしい形にすればいいんだ。あれではまるで結婚するために、自分を誰かに売り渡したようなものじゃないですか」

女はうなずきもしないが、反論もしないで、坂崎の顔を見返している。若い女がいきなり男に話しかけられたときは、もう少し警戒心か、あるいは無意識の媚びのような色を、少なくともその目に浮かべるはずなのに、そのどちらも読みとれない。目の全体が大きいだけでなく、白目の部分がひどく澄んでいることに坂崎は気づいた。冷たいのではない。白磁の壺の名品の肌のように、いろんな色や影を溶かし沈めこんだ深い白さだと思う。

「失礼でしたか。きょうのパーティだけでなく、この頃、結婚式がどんどんぜいたくになっていることに、目頃から腹を立てていたもんで。自分というものを、自立性というのかな、もっと大切にしないと……」

「そうよ」

とはっきりと答えられて、坂崎は驚く。適当にしゃべっていたつもりではないが、漠然と感じていたお互いの距離感をいきなり乱されたような、めまいに似た感じを一瞬覚える。年齢はまだ二十

二、三歳ぐらいにしか見えないのに、この若い女には、物静かなだけではない強くしなやかな芯のようなものがある。思いがけなく強い興味を、坂崎は覚えた。

「このホテルにはローストビーフのうまいレストランがあるんですが、一緒に食べませんか。ひとりで食事をするのはさびしいなと思ってたところなので」

典型的な女を誘う手口じゃないか、としゃべりながら思ったが、ひとりで夕食をとるのが味気ないと考えていたことは事実だ。玄関の外は、もうほとんど暮れていた。本当に暗くなる前、街の灯は一番わびしく見える。断られてもともとだ。

「パーティで何も食べなかったから、少しお腹がすいてたの」

女はごく自然に感情をこめてすっとそう答えたが、少しも狎れ狎れしくは感じない。

このところしばらく経験したことのない心のたかぶりを、坂崎は覚えた。

庭園に面した側は一面に厚いガラス張りになっているレストランで、二人は食事をとった。メイ・レストランでもキャフェテリアでもないその中間の、格式張らない落ち着いたレストランだった。夕食にはまだ時間が早目だったので、窓際の席をとることができた。

ワインをとって食事が続ける間に、坂崎はいよいよきょう初めて出会った女のような気がしなくなった。女はワインも遠慮せずに飲む。余りアルコールの強くない彼は、目のまわりが熱くなってきたが、女の顔は、少しも赤味を帯びない。

「きみは酒が強そうだね。見かけによらず」

「だって北国の育ちですから」

やや鼻にかかるしゃべり方も、そのせいだと納得された。繭をつくる前の蚕の肌を思わせる皮膚の白さ。

「実はね、昼間の披露パーティのとき、壁のところにひとりで立っていたきみを見て、変わったひとだと、とても印象に残ったんだ。みんな興奮してはしゃいでた。きみだけがひっそりと立ってた」

「わたしもあなたに気がついてたわ。みな礼服をきちんと着てるのに、あなただけその服で上着のボタンもはめないで、片手をポケットに入れて歩きまわって……」

「まるで野良犬のように……」

「新聞記者みたいだと思った」

坂崎は女の勘に驚きながら言った。

「新聞記者のイメージってそんなに悪いのかい」

「そうじゃないの。うちの会社の男のひとたちとどこかちがってる。少しはみ出てるっていうのかしら」

「でもぼくはきみが想像しているような、テレビのドラマなどによく出てくる事件記者じゃないよ。外報部って、外国関係の部なんだ」

「じゃ外国によく行くのね」

「そのかわり日本の国内をよく知らない。とくに北の方はほとんど知らないんだ。知らないんだけど、どうしてかこの頃、妙にそっちに行ってみたい気がする」

女はワインのグラスを手にしたまま、しばらく坂崎の顔を、ひどく遠くのものを見つめるように、心もち目を細めて眺めた。

「あなたたちにはわからないわ。少なくともあなたが考えるようなロマンチックなところじゃ全然ない。そろそろみぞれが降り始める頃だけど、毎日薄暗く曇って冷えて、それから雪。生きるにはそれはきびしいのよ」

「それはわかってる。もうそれほどロマンチックな年齢じゃない。そのきびしさに自分をさらしてみたいと……」

「想像してるだけだから、そんなことが言えるんだわ」

そしてもう一度、坂崎を見つめた。まるで自分の中、というより背後まで見すかすように思われた。鋭いというのではない。穏やかな目差なのに、丸ごと自分が見られるような不思議な目つきだ。

「あなたは悪いひとじゃない。でも迷ってる」

いきなりそう言い切った声は低い力があつた。その感じが意外に不快ではない。

照明された庭園では、すでに黄ばみ始めているはずの芝生が妙になまなましく見え、一部だけのぞいている夜空が、硬く青黒かった。背後でナイフかフォークが皿に当たるカチカチという音が聞こえる。

「で、きみは迷ってない」

遠慮しながら聞き返す。

「ええ少しも」

女は微笑さえ浮かべながら、坂崎の目を正面から見すえてそう言った。一瞬坂崎は相手が自分より少なくとも十歳は若いということを忘れて、一種まぶしいような思いで目をそらしかけたが、その視野の端に女の頸にかかった細い銀のネックレスが光るのを見た。女の姿からもう完全に少女の硬さは溶けているが、熟し切った女のけだるさはまだ現われていない。

「わかったよ。きみはきびしい自然の中で育ってきて、ぼくはこの世界一か二の怪物のような大都会のなかで、まあ、適当にやってる。ふらふらしながら、適当に世の中や他人に腹を立てながら、結構無責任なひとり暮らしを楽しんでいる。そういうことだろ」

坂崎は苦笑しながらわざと冗談めかして言ったが、意識した以上に、本当のことをしゃべったことを、言い終わってから気がつく。この若い女の言葉や態度より、身についている雰囲気そのものが、妙に自分を裸にする。

危険だぞ、という思いも心をかすめかけている。ひとりの他人に、ひとつの生き方に、ある程度以上深く自分をかかわらせないこと、つまりあらゆるものと適度の距離感を保つこと——それが自分のもって生まれた性格なのか、すでに十年になる新聞記者という職業がら身につけてきた一種シニクな「客観的態度」なのかはわからない。ただそういう生き方の姿勢が、この大都会の中では便利なことだけは確かだ。孤独なのではない、単独なのだ、と彼は時に口に出してもいい、内心でもそう思い続けてきた。

もちろんそういうことを考えつめたり、思いあぐねたりすることはない。そんな重いものを心にひきずり続けていたら、一日毎に、いや夕刊まで入れれば半日毎に消えてゆく新聞の仕事に耐えら